

令和 5 年 4 月 18 日現在

機関番号：32601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13433

研究課題名（和文）中国古典文献における井戸の諸相 道具・しぐさを手がかりに

研究課題名（英文）Various aspects of wells in classical Chinese literature with special reference to tools and gestures

研究代表者

喜多 藍（山崎藍）（Kita, Ai）

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：10723067

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中国古典文学における井戸の描写、およびそれにまつわる道具や、井戸の周囲などを「めぐる」という行為を主な検討材料とし、民俗学的視点から、古代中国の人々がそれらの場所・道具・行為をどのようなものと認識し、如何にその象徴性を詩歌などに反映させたかを考察した。本研究により、少なくとも唐代までの詩歌において、井戸・釣瓶・轆轤・何かの周囲をめぐる行為など、場所や道具、儀礼に対して、共通してある観念が存在したことを明らかに出来るとの見通しを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の中国古典詩の研究では、「士」（教養人）の文学として「民」とは切り離れたところでその思想性・文学性を問うことが主流であったが、本研究では「民」も含めた中国の生活文化を、思想書・文学書など文献を幅広く調査するととどまらず、中国の出土文物、現代中国の民俗調査結果、日本民俗学の研究成果を取り込みながら解明した上で、唐詩に新解釈を加える方法を採用した。中国古典詩を研究対象としつつ文言小説（散文）との関係、日本文学や昔話の話型をも視野に入れて、立体的な把握を行い、中国古典詩の研究と中国民俗学・考古学を繋ぎ中国少数民族や日本をも比較対照とした本研究は今後のアジア研究の新しいモデルを提示するものである。

研究成果の概要（英文）：This research examines how ancient Chinese people perceived the sites, implements, and actions associated with wells, and how authors reflected the symbolic character of those things in poetry, from a folklorist perspective. To this end, its chief objects of consideration will be depictions of wells in Chinese classical literature, their related implements, and the act of "circling" around wells. Yet, as the present study is thought to have made clear, in poetry at least, up to the Tang Dynasty, there existed shared concepts regarding tools, places, and rituals, including wells, buckets, winches, the practice of circumambulating, etc.

研究分野：中国古典文学

キーワード：井戸 天地瑞祥志 かんざし 厠

1. 研究開始当初の背景

(1) 1980年代以降、民俗学の分野において、境界と認識される「場」の研究が活発に行われてきた。例えば宮田登氏は、日本各地での調査および柳田国男氏などによるそれまでの成果を通して、井戸や橋・辻といった場所では怪異が多く発生していることに着目し、このような場所があつた世とこの世の接点、すなわち「境界」と考えられてきたとする。そして「死後井戸端に亡霊が出てくるとするのは、井戸を通じてあの世とこの世がつながっていることを示している。井戸はあの世とこの世の入り口になるという考えから、出てくる場所になりやすいのである」と述べる(『妖怪のトポロジー』『妖怪の民俗学 日本の見えない闇』岩波書店、1985年)。また飯島吉晴氏は、昔話や年中行事・建築儀礼などを通して日本の廁のイメージを分析し、廁はこの世と異界との「境界的領域」であり、人やものが別のものに変換する空間であると結論づけている(『廁考 異界としての廁』『竈神と廁神』人文書院、1986年)。このような境界と認識される「場」の研究は、「簾」や「籠」といった境界の「象徴物」に関する考察(常光徹「境界の呪具」『簾』『学校の怪談』ミネルヴァ書房、1993年・近藤直也「節分の籠」『日本民俗学』146、1983年)、境界で行われる「しぐさ」を取り上げて、その「しぐさ」の意味を検討する研究(常光徹「後ろ向き」の想像力(『しぐさの民俗学 呪術的世界と心性』ミネルヴァ書房、2006年)、怪異と遭遇しやすい夕暮れ時と夜明け時が時間の境界であるとする研究(柳田国男「かはたれ時」(『定本柳田国男集』(4)、筑摩書房、1963年・小松和彦「かはたれ時、たそがれ時 神隠しと隠れんぼのタブー」(『建築雑誌』106(13-2)、1991-4)などにも応用された。民俗学大系として出版された日本民俗学シリーズ『怪異の民俗学』第8巻が『境界』と題して発表され、上述した宮田氏・飯島氏をはじめとした境界研究や境界の理論的研究に関する論文を多数紹介した上で、境界研究の現状について整理・分析を行っている。

(2) 近年、中国文学の領域でも上述の「境界論」を応用した研究が進んでいる(相田洋『異人と市 境界の中国古代史』(研文出版、1997年)や、呉裕成(『中国的井文化』天津人民出版社、2002年)など)。これらでは、主に『太平広記』所収の文言小説や史書に描かれる井戸や橋などについて分析を行い、これらの「場」がこの世と異界との境界としての役回りを果たしていることを指摘している。先行研究の成果は大変示唆に富んでいるが、惜しむらくは、文言小説や史書以外の、井戸や橋を描いた中国古典詩歌や他の文献資料にあまり関心を払っていない。また、これらの先行研究で採り上げられていない作品も少なくない。

(3) そこで本研究は、中国古典文献、特に詩歌に対して、民俗学的視点から読解を試みた。上記の通り、従来、史書・筆記の記載や文言小説については民俗学的視点による研究が行われ、少しずつではあるが、重要な成果を生んできた。しかし詩歌に対しては、このような研究はごくわずかしが行われておらず、しかも対象とされるのは、ほとんどが民歌風の作品のみである。中国の詩歌は、原則として、文人が国家社会に対する感慨を表明するものとされ、その解釈に際して重要なのは、作者の生涯のどんな時期に、社会のどんな状況の下に作られたかを、正確に知ることであるとされてきた。民俗学的視点から見えてくるものは、民衆の習俗にすぎず、それは文人の思想とは別個のものであり、作品理解にとって考慮するに値しないものとされてきたという現状がある。

2. 研究の目的

(1) 本研究により、少なくとも唐代までの詩歌において、井戸および、それをめぐる道具(釣

瓶や轆轤・かんざし)何かの周囲をめぐる行為など、場所や道具、儀礼に対して、共通してある観念が存在したことを明らかにするというのが本研究の目的である。この共通観念は、従来の文人の思想の範疇からはずれたもので、現代の我々は資料の調査と分析の末によやく手がかりを手に入れ、作品の正しい理解にたどり着くことが出来る。だが、作者達は、読者は誰もがそれを知っていること、その観念を共有していることを前提に、詩作をしているのである。これは、広い意味で、ひとつの信仰と呼べるものであろう。この信仰に着目することにより、詩歌研究の新たな可能性を探ると共に、古代中国の研究には、未開拓の大きな領域が残されていることを、示すことが出来たと考えている。

3. 研究の方法

(1) 中国古典詩歌を中心に、文言小説などの古典文献を題材として、中国古代に井戸が如何なる空間と認識されていたか、そして井戸の周りで行う動作や行為、そして関連する道具がどのような象徴性を帯びているかを考察する。中国の井戸に関しては、文言小説や史書などを用いた先行研究で、この世と異界を繋ぐ境界として描かれているとの指摘がある以外、ほとんど検討がなされていないが、中国古代において境界となる「場」、そしてその「場」に関連する道具や行為にどのようなイメージが附されていたかを加味することで、作品の新たな風貌を明らかにし、そこに込められた感慨をより正確に理解出来ると想定される。

(2) そこで本研究では、(一)民俗学的視点を取り入れ、文言小説や史書、筆記の記載に限定せず、古典詩歌をも対象に加え、空間に対するイメージ分析を行う。(二)道具(瓶や轆轤、かんざしなど)についても分析を進め、より多角的視点から作品を解明する。(三)一定の形式をもって繰り返し行われる儀礼(「めぐる」行為)の意義を明らかにするという三つの手法をおもに採用とした。これらの手法は従来中国古典文献を解読する際にはほとんど取り入れられていない。

(3) 従来の中国古典詩の研究では、これを「士」(教養人)の文学として、「民」とは切り離れたところで、その思想性・文学性を問うことが主流であった。それに対して、本書は、「民」も含めた中国の生活文化を、思想書・文学書・本草書など文献を幅広く調査するととどまらず、中国の遺跡・出土文物、現代中国の民俗調査結果(少数民族を含む)、日本民俗学の研究成果を取り込みながら解明した上で、唐代の詩に新たな解釈を加えるという方法を採用している。さらに、中国古典詩を研究対象としながら、文言小説(散文)との関係、日本文学や昔話の話型をも視野に入れて、立体的な把握を行っている。中国古典詩の研究と中国民俗学・考古学を繋ぎ、中国少数民族や日本をも広く比較の対照とした。中国古典詩の研究と中国民俗学・考古学を繋ぎ、中国少数民族や日本をも広く比較の対照とする学際的な本書は、今後のアジア研究の新しいモデルを提示するものと言える。

(4) 以上のような方法論は、机上の研究だけではなく、現地調査も欠かせないことから、井戸が描かれた画像石や画像磚などの出土文物における井戸の描かれ方、また、考古物が多く出土している中国にフィールドワークに赴いて調査を行い、中国古代におけるそれぞれの「場」へのイメージ分析に応用する。

4. 研究成果

(1) 先秦から唐代までの詩歌を主な検討対象とし、かんざしが詠われる作品を概観した。執筆のきっかけは、井戸水をくみ出す釣瓶(つるべ)がもつ「魂の依り代としての機能」の象徴性を検討する際に用いた白居易の新楽府「井底引銀瓶」であった。夫から離別を言い渡された女性が主人公の本詩の冒頭部に、「釣瓶が地上に引き上げられるところで井戸底に落ちてしまっ

た、簪を磨き、出来上がりかけたところで折れてしまった」と詠われている。これまでに分析してきた瓶と併せ、かんざしの象徴性を検討することで、この詩をよりよく理解できると考えたためである。この「井底引銀瓶」を端緒として論文にまとめ、成果として発表した。

(2) 唐代に薩守真によって書かれた祥瑞類書である『天地瑞祥志』において、井戸に関連する「宅舎」「醴泉」「井」の訳注を作成し、思想・瑞祥の観点から井戸がどのように用いられてきたのかを検討した。また、日本の古典文学における井戸描写について、平安文学までの作品を中心に概観をした。そのことにより日中の井戸描写の相違点について言及した。

(3) 本研究をもとに拙著『厠・井戸・簪 民俗学的視点に基づく考察』(勉誠出版、2020年12月)を上梓した。本書は独立行政法人日本学術振興会令和二年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金 研究成果公開促進費「課題番号二〇HP五〇四五」)の助成を受けたこと、また、本書により青山学院学術賞を受賞したことは、本書が公的に一定の評価を受けている証左と言える。

(4) 上述の拙著『厠・井戸・簪 民俗学的視点に基づく考察』(勉誠出版、2020年12月)は2021年3月7日付の香港新聞『明報』において紹介されており、本研究が中国においても強い関心を持たれていることを示している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 山崎藍	4. 巻 0
2. 論文標題 井戸-「桔槔式」と「轆轤式」-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 古代中国の神話と祥瑞：武氏祠画像石拓本	6. 最初と最後の頁 88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎藍	4. 巻 0
2. 論文標題 西王母	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 古代中国の神話と祥瑞：武氏祠画像石拓本	6. 最初と最後の頁 72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎藍	4. 巻 52
2. 論文標題 京都大学人文科学研究所蔵『天地瑞祥志』第十九翻刻・校注（六）「狐」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 青山語文	6. 最初と最後の頁 175-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山崎藍 佐野誠子	4. 巻 34
2. 論文標題 京都大学人文科学研究所蔵『天地瑞祥志』第十九翻刻・校注（五）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名古屋大学中国語学文学論集	6. 最初と最後の頁 1-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/jouc11.34.1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山崎 藍	4. 巻 244
2. 論文標題 白居易新樂府「井底引銀瓶 止淫奔也」に詠われる「瓶沈簪折」について - 唐詩に垣間見える術数文化 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 78 - 89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎 藍	4. 巻 70
2. 論文標題 かんざしの喪失と破壊「かんざしの喪失と破壊 先秦から唐代に至るかんざし詩の変遷と「長恨歌」の試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本中国学会報	6. 最初と最後の頁 59-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山崎 藍, 佐野 誠子, 佐々木 聡	4. 巻 31
2. 論文標題 京都大学人文科学研究所蔵『天地瑞祥志』第十七翻刻・校注(上)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名古屋大学中国語学文学論集	6. 最初と最後の頁 59-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18999/jouc11.31.2	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計4件(うち招待講演 3件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山崎 藍
2. 発表標題 唐詩に垣間見える術数文化――白居易・李賀の詩歌分析を中心に――
3. 学会等名 東西知識交流と自国化 汎アジア科学文化論(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山崎藍
2. 発表標題 ケネス・レクスロスの中国古典詩歌翻訳について 杜甫・李清照を例として
3. 学会等名 国際シンポジウム「文学による日米の架け橋 "Rethinking the Legacy of Kenneth Rexroth: Literature, Translation, War" ケネス・レクスロス、翻訳、戦争（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山崎藍
2. 発表標題 湯僧清「詠渌井得金釵」の問題点
3. 学会等名 六朝学会第21回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山崎藍
2. 発表標題 顔之推「稽聖賦」について
3. 学会等名 【国際学術シンポジウム】 術数文化 の世界 学術・占術・文学 （招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 高芝 麻子 (著), 遠藤 星希 (著), 山崎 藍 (著), 田中 智行 (著), 馬場 昭佳 (著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新典社	5. 総ページ数 307
3. 書名 とびらをあける中国文学 日本文化の展望台	

1. 著者名 山崎藍	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 336
3. 書名 中国古典文学に描かれた厠・井戸・簪	

1. 著者名 名和敏光 編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 293
3. 書名 東アジア思想・文化の基層構造 術数と『天地瑞祥志』	

1. 著者名 早稲田大学會津八一記念博物館編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 早稲田大学會津八一記念博物館	5. 総ページ数 115
3. 書名 古代中国の神話と祥瑞－武氏祠画像石拓本－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------